様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 25 日現在

機関番号：41309
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19539001
研究課題名（和文）　文化が老年期の物語テキスト認知処理過程に及ぼす影響

研究課題名（英文）　Effect of culture on cognitive process of narrative text in later life

研究代表者
細川　彩（HOSOKAWA　AYA）
仙台青葉学院短期大学・講師
研究者番号：00451500

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本と米国における異文化間及び年齢群間比較研究を行い、文化が老年期の物語テキスト認知処理過程に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。その結果、両文化群において、表面的意味想起課題においては若年者が、解釈的意味想起課題においては、高齢者が、それぞれ高い遂行成績を示した。さらに、高齢者は、自分が属さない文化が反映された物語テキストが刺激として呈示されると、より深く統合的な解釈的意味想起をしていた。

研究成果の概要（英文）：This study examined cultural and age effect on the recall of interpretive meanings of narrative text from the life-span developmental perspectives which defines that cognitive process is influenced by multiple factors including culture, society, and history. The results found that older adults represented deeper and more synthetic interpretation than younger adults while younger adults recalled more literal propositions than older adults across the culture. Moreover, older adults represented deeper and more synthetic interpretation when the stimulus text including implication of culture to which they do not belong to were presented.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,100,000	0	1,100,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	390,000	2,790,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育心理学
キーワード：生涯発達、老年期、物語テキスト認知処理過程、解釈的意味想起、表面的意味想起、異文化間、社会的認知ゴール、Wisdom

１．研究開始当初の背景

誕生から成熟に至る変化が肯定的に発達と言及されているのに対し、成人から死に至るまでの変化は否定的に老化と呼ばれる（Perlmutter, 1988)。「たいていの人間の能力とはおよそ 18 ないし 25 才ぐらいの最盛期到達後、次第に衰退することはほとんどの研究が報告しての通りである（Wechsler, 1958)」という考えが一般的に認められてきた。しかし、1990 年代に入り、「入念に加齢に関する研究を追及すれば、病気が発見されない限り、加齢それ自体が認知や知的活動に

おける衰退や喪失を引き起こすわけではない（Khachaturian, 1991)」という、新たな展望を支持する研究が注目され始めた。
生涯発達心理学において、発達とは、1）生涯行程であり、2）多次元性、多方向性（つまり、流動性知能は低下するが、語彙力、読解力、文章力、一般知識などといった結晶性知能は獲得（gains）とされ、それらは個人の能力、経験、社会との相互作用によって多岐にわたること)、3）可塑性のもので、4）歴史、文化、社会との関連によって形成され、5）多様な要因によって影響されるもの、と定義されている(Baltes, 1987)。獲得(gains)とは、新しい組織、機能の獲得、すでに存在している組織あるいは機能の効率の改良、存在している組織あるいは機能の新しい応用、新しい課題あるいは領域における機能のことであり、衰退（losses）とは、存在している組織、機能の消滅、効率の低下である。獲得と衰退 （gains & losses）における関係について、Labouvie-Vief は、「獲得（gains）によって衰退（losses）が促される」、Baltes は、「選択的最適条件として獲得（gains）が衰退(losses)を補償する」として多次元性、多方向性について指摘し、Perlmutter は、「衰退（losses）と獲得（gains）は同時に偏在し、そこには因果関係は存在しない」、とそれぞれ主張しているが、一般的には、衰退（losses）は幼児期に起こり、また逆に、獲得（gains）は高齢期にも起こるということが認識されている。つまり、認知発達における変化は生物学的（身体的）成熟に付随するという概念に基づき、幼児期の変化は獲得（gains）の作用の累積であり、高齢期の変化とは衰退（losses）の作用が累積であるとする伝統的発達心理学の考え方とは異なる。このような生涯発達心理学の視点に基づいた、テキスト情報処理の性質上における年齢差に関心が寄せられている（Wingfield, 1990)。高齢になるに従って、テキストの詳細部分の情報が脱落してしまうものの、概要部分の命題想起は問題なく処理されている。この加齢に伴う変化は、情報処理効率における低下という衰退に対する補償作用と考えられる（Adams et al., 1991)。そこで、Adams ら（1997）は、この概要部分の命題想起と詳細部分の命題想起間のトレードオフの関係は氷山の一角と考えた。特に、物語の想起においては、若年者と高齢者の違いとして、１）「物語を自由に想起して下さい。」という教示があると同時に、テキストの表面的部分を独自の深い解釈的意味へと再構成すること、２）単に命題の意味基準の高い順に再生するのでは無く、物語の不可欠な要素を高度に統合し、簡潔に表現すること、の二つの特徴から主に研究をすすめられてきた。例えば、熟練したチェスプレイヤーが個々のチェスピースからではなく、動きの過程やパターンからチェスボード全体の流れを読むのと同じことである(Dreyfus & Dreyfus, 1986)。物語の詳細部分の情報が抜け落ちるのは、より深く、心理的、象徴的意味を処理する能力が年齢と共に発達するからであると結論づけられた(Adams, 1991: Labouvie-Vief, 1990)。しかしながら、これまで成人の文章記憶の研究では主に本文の表面的意味と密接に結びついている命題の理解に焦点が当てられてきた。多くの研究において、テキストの表面的意味想起成績が個人の能力と評価されることから、解釈的、統合的処理を考慮する特殊なリサーチデザインを取り入れた心理学研究法における条件下でなければ、高齢者の処理能力は過小評価されてきたと考えられた。従来の詳細部分の情報を含む表面的意味想起に焦点を合わせた記憶課題であれば、解説的(expository text)テキストを用いるのが適当であるが、本研究では、物語(narrative story)を用いた。なぜならば、物語というのは心理的に深いところに働きかけ、象徴的な「風景画」を含み、意味の層は命題自体には明白に示されていないが、本文全体から解釈できるものだからである。従って、解釈的、統合的再構成には、解説的テキストよりも物語テキストが適していると言える。物語の情報処理では読み手に命題と真の深い理解が要求されるが、こうした意味の深さにおける想起は、これまでの文章記憶や加齢に関する研究において非常に大きく無視されてきた。しかし、高齢者が詳細さと分析的情報処理という点において若年者に劣るのは、より統合的あるいは総合的情報処理が行われるからであると考えられた。従って、年齢群間によって解釈の質に違いがみられることが予測されることから、１）物語の深い意味がどの程度反映されているのか(深さ基準)、２）物語における解釈的要素の統合化、総合化がどの程度達成されるか(総合・統合性基準)、の二つの基準による分析を試みた。

２．研究の目的

文化は老年期の認知処理過程に影響を及ぼすことが報告されている。物語テキスト研究の結果においては、高齢者が深く統合的な解釈的意味想起は Wisdom に裏打ちされていることが結論付けられた。しかし、Wisdom の概念は西洋と東洋では大きく異なることも報告されていることから、日本と米国における異文化間研究が実施された（Hosokawa & Hosokawa, 2006)。その結果、日本人の高齢者は圧倒的に深く統合的な解釈的意味想起をしていたことが明らかとなった。その一方で、課題が残された。それは、文化差があまり明らかにはならなかったことであるが、そ

の理由として、刺激としての物語テキストが1 種類のみ用いられたことが考えられた。そこで、本研究では、以下の仮説を検証することを目的に、先行研究の結果を踏まえて、東洋あるいは西洋の文化的意味が反映された 2 種類のテキストを刺激として用いることにし、それに伴い対象者群を増やし、文化が老年期の物語テキスト記憶処理にどのような影響を与えるかについて焦点を絞った実験パラダイムを実施した。

仮説 1.　表面的意味想起においては、若年者群の方が高齢者群よりも命題に基づいた内容を想起するであろう。
仮説 2.　物語の概要想起については、若年者群、高齢者群ともに上手く想起するであろう。
仮説 3.　物語テキストの解釈的意味想起においては、若年者群よりも高齢者群の方が深く、統合的な想起をするであろう。
仮説 4.　文化的に異なる物語テキストを用いることにより、老年期における物語テキスト認知処理過程が明らかになるであろう。

３．研究の方法
本研究の目的は、先行研究での結果を踏まえ、日本と米国の高齢者と若年者を対象に物語テキストにおける認知処理過程を質的に明らかにすることを目的とした 2 部の実験から構成される。それぞれの実験では、異なった物語テキストを刺激として用いる。第 1 実験においては東洋の文化が反映された物語テキスト、第 2 実験においては西洋の文化が反映された物語テキストを用いることとした。平成 19 年度は、両文化群に対し、東洋の文化的内容が含蓄されたテキストを刺激として用いた第 1 実験を施行した。また、平成 20 年度には、同様の手続きで、西洋の文化が含蓄されたテキストを刺激とした、第 2 実験を施行した。

(1) 対象者
「せんだい豊禮学園」に在籍する高齢者 37 名と宮城大学に在籍する若年者 40 名から構成される計 77 名の日本人群と米国モンタナ州の「ミズーラシニアセンター」に在籍する高齢者 40 名とモンタナ大学に在籍する若年者 40 名から構成される計 80 名の米国人群、合計 157 名を対象に調査実験を施行した。以下の手続きにより面接形式で調査実験を施行した。

(2) 刺激
東洋の文化が反映された物語テキスト：物語テキストの原文は日本語であり、490 語、197 の命題から構成されていたものが、日本人対象者に用いられた。それを忠実に英訳し、バックトランスレイトされ、477 語、198 の命題から構成されたものが米国人対象者に用いられた。西洋の文化が反映された物語テキスト：物語テキストの原文は英語であり、455 語、171 の命題から構成されていたものが米国人対象者に用いられた。それを忠実に和訳し、バックトランスレイトされ、476 語、171 の命題から構成されたものが日本人対象者に用いられた。

(3) 手続き
被験者からインフォームド・コンセントを得た上で個別に課題を実施した。
①物語テキストの読解:時間制限無しで黙読してもらい読解に要する時間はストップウォッチで測定した。テキストは、行動や出来事が連続して起きる単純で心理的考察を引き出す要素を持つ。
②挿入課題として WAIS-R の単語問題を実施した。
③物語の想起課題：インタビュー形式で、表面的意味想起課題と解釈的意味想起課題を実施した。文化（日米)、年齢（若年・高齢)、性（男女）について全ての群を表面的意味想起先行群と解釈的意味想起先行群に二分しカウンターバランスをとった。想起内容はテープレコーダーで記録した。
④物語のテキストの感想について、難易度、親近性、好み、同一性の 4 項目を 5 段階で評価してもらった。

(4) 採点と分析
各被験者の回答をテープ起こしコーディングした。表面的意味想起は予め命題がチェック項目として記された採点用紙に沿って採点した。各命題は重要性の程度によって 4 段階に分類した。解釈的意味想起は深さと総合・統合性の 2 基準を 5 段階評価した。

４．研究成果
表面的意味想起において、日本、米国の両文化群において、若年者群の方が高齢者群よりも高い遂行成績を示したことで仮説 1. を支持した。また、すべての文化および両年齢群において、概要想起成績の方が詳細想起成績に比して高い遂行成績を示したことで仮説 2. を支持した。
解釈的意味想起に関しては、日本、米国の両文化群において、高齢者群の方が若年者群よりも高い遂行成績を示したことで仮説 3. を支持した。また、解釈的意味想起を深さ基準と統合性基準で分析したところ、日本、米国の両文化群における高齢者群は、自分が属した文化の反映されていないテキストを処理する際、そうである群よりも高い遂行成績を示した(Figure 1. & Figure 2.)。また、

文化別で分析した際、米国の高齢者群は、東洋の文化が反映されたテキストの条件下では、解釈的意味想起において深さおよび統合性の２基準において日本人の高齢者群よりも高い成績を示したことに加えて、表面的意味想起においても高い成績を示した。これらの結果から、高齢者は、文化的に馴染みのない物語テキストを統合的に深く符号化することにより、その表面的意味想起を促していると考えられた。高齢者は、馴染みのない刺激が呈示されると、瞬時に、人生経験から成る知識や Wisdom 駆使し、物語テキストの意味に効果的に焦点を絞り、解釈をし、その結果、表面的意味想起における処理をも向上させたことが示唆された。

表面的意味想起では、全ての対象者群が、テキストの詳細想起に比較して概要想起で高い成績を示したことで仮説を検証することができた。日米共通で若年者群は表面的意味想起遂行において、高齢者群は解釈的意味想起遂行において高い成績を残し、このことは life-stage における社会的認知の役割について示唆した。若年期においては新たな大量の情報の効果的な処理が重要であり(Labouvie-Vief, 1985)、老年期ではこれまでの人生経験を通して培ってきた包括的な知識と wisdom を効果的に応用・活用していくことが重要なのである(Baltes, 1993)。高齢者が物語の意味の深さと総合性に焦点を当てるのは、抽象的意味知識構造と関係し、人生における数え切れぬ程の経験の中には、テキストの重要性や道徳と関連するような出来事が記憶として連結され、組織され、貯蔵されており (Black & Seifert, 1985; Dyer, 1983)、詳細部分が脱落してしまうのは、豊富な経験から獲得した wisdom を駆使して、多くの情報から重要なものを瞬時に分別し、個々の要素を統合し解釈を深めることによる衰退 (loss) の補償、あるいは wisdom が老年期の際立った獲得 (gain) として存在するからと考えられる。

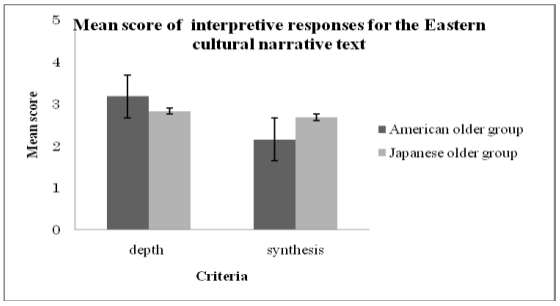

Figure 1.

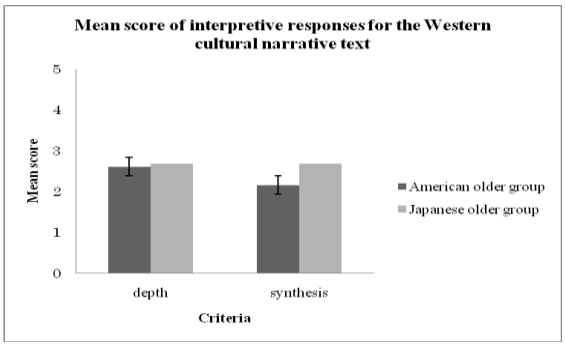

Figure 2.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

細川　彩.　社会的認知と文脈における認知の視点からの老年期における物語テキスト記憶に関する考察.　2009、研究紀要青葉、査読無、Vol. 1. 1.、pp.69-76.

〔学会発表〕（計３件）

① Aya Hosokawa.　Effects of patterns of interpretation in later life on the recall of literal propositions in culturally unfamiliar text.　The Gerontological Society of America. 62nd Annual Scientific Meeting. 2009 年 11 月 20 日.　Atlanta, Georgia. USA

② Aya Hosokawa. The study on the recall of the interpretive meanings of narrative texts in later life from the cross-cultural perspectives. International Conference on Asia Pacific Psychology. 2009 年 8 月 25 日. Seoul, Korea.

③ 細川　彩・細川　徹.　文化が老年期の物語テキスト認知処理過程に及ぼす影響 1. 日本心理学会第 72 回大会.　2008 年 9 月 21 日. 北海道大学.

６．研究組織

(1)研究代表者

細川　彩（HOSOKAWA　AYA）
仙台青葉学院短期大学・講師
研究者番号：00451500

(2)研究分担者

（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）
研究者番号：